

浄土を求めさせたもの — 『大無量寿経』を読む—

第 120 回 (2019.03.01) の要旨

拝読文(『真宗聖典』65頁)

汝今また自ら生死老病の痛苦を厭うべし。悪露不浄にして楽しむべき者なし。宜しく自ら決断して、身を端しくし行を正しくし、益すもろもろの善を作りて、己を修し体を潔くし心垢を洗除し、言行忠信あつて表裏相応し、人能く自ら度して転た相拯済して、精明求願して善本を積累すべし。一世の勤苦は須臾の間なりといえども、後には無量寿仏の国に生じ、快樂極まりなし。長く道徳と合明にして、永く生死の根本を抜き、また貪・恚・愚痴・苦悩の患えなし。寿一劫百劫千万億劫ならんと欲えば、自在に意に随いてみなこれを得べし。無為自然にして泥洹の道に次し。汝等、宜しくおのおの精進して心の所願を求むべし。疑惑し中悔して自ら過咎を為して、かの辺地七宝の宮殿に生じて、五百歳の中にもろもろの厄を受くるを得ることなかれ。」弥勒、仏に白して言さく、「仏の重誨を受けて専精に修学し、教えのごとく奉行して敢て疑いあらじ」と。

「汝今また自ら生死老病の痛苦を厭うべし」と。この「汝」というのは、今、対告衆である弥勒に対して、仏陀釈尊がもう一度、態度を改めて生きていくことを呼びかけているのです。普通は「生老病死」というのですが、それをひっくり返して、「生死」と「老病」と。

「生死」は、生れて生きて死んでいくということが、元にあるのでしょうかけれども、仏教語としての「生死」は、生存が迷いであるという、迷いの命であるということを表しています。この命が、無明という迷いに覆われて、明るみの命として生きていくという方向性が見出せないままに、終わっていくような在り方を「生死」というふうに押さえるわけです。

それが「老病」と言われてくる場合には、命が活着している限り避けることのできない現実の在り方です。特に現代では、長寿社会にはなっているけれども、「老」が苦であるという事実が大変大きな問題です。どれだけ頭脳が明晰であったとしても、生命力の衰えが脳にきた場合には、前の記憶が途絶えてしまうというやっかいな問題があります。老人性の認知症というのは、家族の顔を見ても分からないというほどになってしまう。どれだけ命が長引いたとしても、命自身が衰えていくことは止められない。

そしてそれが、「痛苦」としてある。「生死老病」について痛みを感じずというのが、この段の教えの意味でもあるわけです。それで「痛苦を厭うべし」と。これは、仏陀が我々人間に、苦悩の事実は迷っているからであると教えてくださる。迷っているという事実を教える時、そこに手がかりとして、活着していることに痛みがあると。その痛みを厭うべしと教えてくださっているわけです。「厭離穢土 欣求浄土」というふうに浄土の教えは穢土を厭う。

つまり我々が活着している場所が穢土であるということは、我々は煩悩がらみで本当に命を汚していくような在り方をしている。そういう存在が寄り集まってお互いに汚し合うわけですから、そういうところに、穢土という言葉が出てくるわけです。浄土とは、仏陀の感じておられる場所であつて、清浄であるということです。仏陀は、無明の命を突き抜けて、闇を破って、明るく本当にあるべき命を回復して活着している。それは、凡夫からすると清浄である、そういう言葉で教える。すなわち、精神的な汚れ、精神的な清浄性のことです。

貪欲・瞋恚・愚痴に代表される煩悩というものは、生命を汚すわけです。腹が立ったら、ポッポポッポしてきて、ろくなことがないわけです。だから自分自身が汚れる。自分が汚れるだけではなく、周りに迷惑をかけるわけです。そういうふうにして、お互いに傷つけ合っただけ生きられないということが、煩悩という言葉によって教えられます。

しかし如来は、一旦獲得したその清浄なる命から、濁世、穢土という、汚れた世界に出て来て、汚れた世界を活着している苦悩の衆生を哀れんで、教えを説いてくださる。お互いに無理をしているというか、

お互いに傷つけ合ってしか生きられないような在り方をしている衆生のところに来て、そういう在り方は悲しいことであると。もっと清浄な、美しい、正しい生き方があるという教えを説いてくださるのを如来というわけです。

ここでは、「厭う」という心理を呼びかけることが、この段の教え方になっております。

関連して、「**悪露不浄にして楽しむべき者なし**」と。この「悪露」というのは、生理現象があらわすもの。外から、様々な栄養素を取り入れたり、水を飲んだり、呼吸をしたりすることによって、命が生きるとそれが排泄物になる。人間は生命が排泄したものを厭う。匂いなどを不快に思うわけです。そういうものを「悪露」という言葉でいうわけでしょう。

そういう在り方をしているのだから、「**宜しく自ら決断して、身を端しくし行を正しくし**」、「端身正行」、自分自身の生き方を少しでもまっすぐにしようと。そして「**益すもろもろの善を作りて**」と。悪をなすのではなくて善を作り、「**己を修し体を潔くし**」、「修己潔體」、己自身を修するということは、制御するということです。體を潔くするとは、清潔にするという意味でしょう。そして身体を清くするだけではなく、「**心垢を洗除**」する。心の垢とは煩惱のことでしょう。「**心垢を洗除し**」、心の垢を洗い除く、そういう努力をすると。

そして「**言行忠信あつて表裏相応し**」、「言行忠信 表裏相応」、言行一致ということがあります。言うことと行うことです。「忠」は、忠義の忠ですから、心を込めて尽くすという。「忠信」とありますから、真ん中の心ということです。一貫して信頼できるような態度でしょう。裏表の無い態度といいたいでしょうか。しかし現代は、この忠ということほど価値として難しいことはない。何に対して忠なのかということが、もう一つハッキリしませんからね。

「信」とは、人間社会を作っている一番本にあるような心理作用、といってもよいのかもしれませんが。だから、信がないと、人間社会というものは作り上げられない。唯識という学問の場合は、善の心所、善という心理作用と、煩惱という心理作用ということを経験するわけですが、善という心理作用の一番初めにあるのが、信です。信ということが大事な作用なのです。信じられなくなるということは、人間にとって不幸なのです。人間関係でも、社会の状態でも、国との関係でも信を成り立たせるということは、大切な方向性なわけです。

それが今は、どうでしょうか？今の時代というのは、何が信じられるのかよく分からない。そういう危うい時代を生きなければいけないというのが、我々ですね。大変危ない時代です。まさかと思っているのだけれど、そのまさかが起こるかもしれないという。それは、本当に信頼していたものが壊れるということです。

仏教の場合は、信に出發して信に終わる。信において学んだり、行じたり、そして覚りを開いたりということをしていけるのだと。これが従来の仏教です。ところが親鸞聖人は、この信の大切さを徹底的に押さえたわけです。自覚的に信ずるとは、そこに「信じられない」という問題を契機にして、にもかかわらず、「信じよう」ということが立てられてくる。それが、ある意味で教えであるわけです。

教えというのは、生きて人間存在そのものを厭わせるということを通して、それでは本当の命とは何であるのかということを経験するものです。そして、本当に信ずるということが人間に成り立つなら、もうそれでたすかるのだと。本当に信ずるべきものを獲得できるなら、もうそれでいいのだというのが、親鸞聖人です。だから信心の仏教と言ってもいいわけです。ともかく一応、「言行忠信」ということを教えて、「表裏相応」すると。

ここに「**表裏相応し**」という言葉が出てきます。表裏、表と裏とが、違うのだけれど、違うままに相応すると。相応するという言葉は、大切な言葉です。天親菩薩は『浄土論』で、「与仏教相応」ということをおっしゃったわけです。仏教と相応するというのは、仏陀の教えと自分とがピッタリ合うと。相応するということは、不一不異なのです。同じになるわけではない。けれども別ではない。ピッタリ合うのだと。こういうわけです。相応というのは、よい言葉ですね。表裏が相応すると。

こういうふうにして、「**人能く自ら度して転た相拯濟して**」、自らがこの仏陀の教えに随って、無明の命を払う。そういうことが成り立つ場合を「度」という、度脱するという言葉で、言われるのです。そして「**転た相拯濟**」するというのは、転じて相手を救う。あるいは衆生を度する。これを相拯濟

すると言っているわけです。

次いで「**精明求願して善本を積累すべし**」と。「精」は精進の精だし、「明」は明るい。明るみを求めるということですかね。「善本」は善の本、善本と徳本という言葉は、親鸞聖人もお使いになります。善本と徳本という関係は、因果だと言われています。善本は因で、徳本は果です。名号は善本でもあり、徳本でもありと教えられていますけれど、そういう違いがあるわけです。「善本を積累すべし」というのは、つまり、善の本、因を作りなさいと。こういうわけです。

そう言って、「**一世の勤苦は須臾の間なりといえども、後には無量寿仏の国に生じ、快樂極まりなし**」。ここにも、「厭う」と関係のある浄土の教えが言われてきています。「一世の勤苦」とは、この世に生きている人生、その間に勤めることは苦であると。働くことは楽しいのではなくて、苦しい。勉強することも楽しいわけではない、つらい。つらいことだけれど勤める。だから、「何でこんなつらいことをやらなければならないのだろう」と思うのが勉強ですよ。でも、勉強しているとそれなりに利益がある。勉強したことの功德があるから勉強するわけです。

この場合は、仏陀の教えを本当にしっかりとやりなさいと教えてきて、「**一世の勤苦は須臾の間**」、「**須臾**」というのは、本当に短い時間、一瞬を表すわけですね。「**後には無量寿仏の国に生じ、快樂極まりなし**」、だからこの短い命で散々苦勞しておけば、後生、つまり、この命が終わった後の命を想定して、そこに楽しい楽果が待っているというわけです。

蓮如上人も「後生」ということをいうわけです。後の生がある、その生において、仏陀が説いてくださる楽しい世界、清い世界あるがごとくに教えて、今生でどれだけつらい人生、苦悩の人生があっても、それは短いのだと。どれだけ短い時間がつらくても、後の長い時間は楽しいのだと。そのように説くことで希望をもたらす。これは一つの教え方だと私はいただいているのですが、その根がここにあるわけです。

これは実は、親鸞聖人の眼からすれば第十九願です。「厭う」という問題も、「善本を積みなさい」というようなことも、つまり、「諸功德を修めなさい」というふうに勧める願が、第十九願ですから。第十九願で教える浄土というのは、親鸞聖人は、方便化身土として押さえておられます。それは、苦悩の人生を生きる一つの智慧として、ここで努力してつらい目に遭っているけれど短い時間なのだ。この結果が極楽になる、後生があるのだというふうに教えるのです。

これは結局、人間の自力心、努力意識に呼びかけて努力せよと教えて、努力するけれども、努力している間はつらいわけだから、努力しているままに楽しいということはないと。結果が楽しくなるのだと。こういう、自力の努力の果報を教えるために、命の二重性といいますが、この世に対してあの世、次の命、死んだ後という教え方をするとということです。

それから「**長く道徳と合明にして、永く生死の根本を抜き**」、「長く」は、長いけれども限界があるような感じ、「永く」は、限界が外れたような感じ、そういう長さなのでしょう。「道徳と合う」と、道徳という言葉は、いろんな意味で使われるのです。仏陀が開いた覚りの世界を教えとして説いた場合にも、道徳という言葉でいいます。また、迷いを生きている人間同士の間で信頼関係を作る道筋、いわゆる倫理のようなものを道徳という場合もある。

ここでは「生死の根本を抜く」と対応するような、「道徳と合明」というわけですから、仏陀の教えが中に入っているのだと思います。「生死」は、無明の命。無明が覆っている形で我々が命を生きている。無明が覆っているその根本を抜くということですね。

「**また貪・恚・愚痴・苦悩の患えなし**」と。「貪」は、貪欲でむさぼり。「恚」は、瞋恚の恚で憤り。「痴」は、愚痴。これを三毒の煩惱と言います。それによって起こす苦悩のわずらい。「患」ということは、「わずらう」ということなのですね。それをここでは、「うれしい」と読んでいます。心理的に患うというわけでしょう。そういう「患えなし」ということです。

そして、「**寿一劫百劫千万億劫ならんと欲せば、自在に意に随いてみなこれを得べし**」と。寿が、カルパ(kalpa)という、一劫と翻訳される劫という単位は、インド人の考えるとにかく長い長い時間です。その百劫、更に千万億劫、命が長くありたいと思うのなら、「自在に」、自分が自分で思いのままであるという。「意に随って」、意のままに、みな長い寿命を得られると。

それは「無為自然にして泥洹の道に次し」と。「無為自然」、仏教用語としての「無為」というのは、「無為法」という言葉があって、「有為」に対する。有為というのは、有限な命、つまり「生老病死」が有為である。この世は全部、「諸行無常」だから有為なのです。「有為法」が、この世の在り方である。けれども、そういう命の中であって我々は、自我のままに、いつまででもいて欲しいと思って止まない。そういう妄念の思いが破られた在り方、それが仏陀の教えようとする無為なのです。無為ということとは「自然」を表すのだと。

「無為自然にして泥洹の道に次し」と。ここに「次し」、次という字がある。次という字を「ちかし」と読んでいます。だからそれは、泥洹という涅槃そのものではないけれども、涅槃にちかひのだと。不思議な言い方ですね。これは先の「快樂極まりなし」という在り方が「無為自然」であって涅槃にちかひと、そういう文章だと思えます。

続いて「汝等」、汝等というのは、ここでは、「なんじら」という複数形のことを汝等と言っていますが、君たちというようなものですね。そして、「宜しくおのおの精進して心の所願を求むべし」と。「宜各精進」、「各」という字は、各々、「一人ひとり」が、ということなのです。一人ひとりが、自分の命の中に、仏陀の教えと相応する志願をもって、教えを聞いていくと。その時には、一人ひとりなのです。それは非常に大事な態度だと思います。この「心の所願」というのは、凡夫の側からではなくて、仏陀の側からの求むべき本当の中心になる心、その心の願うところを求めなさいということです。

そしてその次に、「疑惑し中悔して自ら過咎を為して、かの辺地七宝の宮殿に生じて、」と。その道を疑惑して、途中で後悔する。「中悔して」というのは、「何をしていたのだろう」と思って止めてしまうというようなことなのでしょう。「自ら過咎を為して」、「過」も「咎」も「とが」です。「過」というのは、過失とか、やり過ぎというようなニュアンスをはらんだものです。咎は、文字通り「とが」、罪です。

「かの辺地七宝の宮殿に生じて、五百歳の中にもろもろの厄を受くるを得ることなかれ。」と。「辺地七宝の宮殿」とは、極楽の世界が表現されていて、極楽の中には七宝という宝物があると教える。金・銀・瑠璃・玻璃・磲磔・赤珠・碼碯というものがあると。「それは素晴らしい」と、凡夫は欲がらみで楽しいところに行きたいわけだから、そういうふうに表示するわけです。「**辺地七宝の宮殿に生じて、五百歳**」、それで、楽しければそれでよいというかたちで、その中に閉じ込められてしまい、三宝を見失っていくと。仏・法・僧が見えなくなる。それは金の鎖で繋がれたようなものであると。金の鎖で首を繋がれて、それは五百年間、牢獄に居ると大して変わらない。そういう在り方になってしまっているということが、教えられているのです。

それは楽しいには違いないけれど、もう正しい方向性が見えなくなる。そういう在り方に埋没する、沈殿するということです。だから、死後の極楽ということが一応説かれるのだけれども、それが実は、辺地七宝の宮殿に墮ちるといふ教え、そういう意味を持っているのではないかと思うのです。「**五百歳の中にもろもろの厄を受くるを得ることなかれ。**」と。「厄」とは、災厄の厄ですね。辺地七宝の宮殿の中にあるということは、実は、災いを受けるようなものなのだ。五百年間無駄に、空しく過ぎてしまうのだよと。そういうことを教えてくださっているわけです。

それを受けて、「弥勒、仏に白して言さく、「**仏の重誨を受けて**」と。「仏の重誨」、重い教えを受けて、「**専精に修学し、教えのごとく奉行して敢て疑いあらじ**」と。」、弥勒菩薩が、この教えを受けて、疑わずに本当にその通りやってみましょうと。こういうふうには受け止める言葉ですね。

とにかく、ここに出ている文章は、この後に出てくる「五悪段」を超えていく方向性が教えられているのだけれど、自力の心による努力というものがもたらす結果は、結局、努力自身が重荷になってしまい、その重荷のところには立つことができないで、救いは、次の命でと。第十九願の「修諸功德の願」というのは、功德を修して、努力し続けて、命が終わる時には、きっと迎えに来てくださいよと。臨終に来迎をたのむというかたちになって、次の世の救いが暗示されているわけです。ここは、そういう自力心の努力と重なった教え方なのだろうと思うわけです。

文責：菊池弘宣（親鸞仏教センター嘱託研究員）